

健康文化

大学時代の思い出（2）

岡島 俊三

昭和19年5月9日、大学2年生の途中で勤労働員のため、大同製鋼へ行くことになった。朝7時半に大学に集合、主任の宮部教授に伴われて、物理学科の学生10名は名古屋市南区星崎町の大同製鋼の工場に向かった。

工場長の挨拶があり、勤務時間は朝7時30分から終業時刻は午後5時まで、遅刻しないようにとの注意があり、早速工場内の見学が始まった。広い工場で騒音が立ち込める煙の中で凄惨な作業が行われているのに驚いてしまう。

これまで八事の下宿して東山の大学へ通っていたが、八事からでは工場へはかなりの通勤時間がかかり、新川（現在は碧南市）の家から通っても大して時間の差のないことが判ったので家から通うことにした。

工場に7時30分に行くためには、名鉄三河線北新川駅を5時一寸過ぎの一番電車に乗らねばならない。刈谷で東海道線に乗り換え、熱田で降り、数百メートル歩いて常滑線の神宮前駅から数駅目の大同工場前で降りて、やっと会社の始業時刻に間に合うという寸法である。

会社通いが始まって1週間は、毎日工場の見学である。製鋼工場、調質工場、圧延工場、機械課、技術部等々。ほとんど終日、埃っぽい所に立ち続けているのは、馴れていないせいか結構辛いものである。

工場でお昼の給食が無料で頂ける。食糧事情が逼迫している時勢にこれは非常に有難い。家では大助かりである。大食堂で丼一杯のご飯が出た。しかし時々鯨肉の混じった鯨ご飯が出て、あの特有の臭いには閉口した。

工場への通勤の苦勞も忘れられない。片道約2時間の電車も自動車も通勤客で超満員である。車内に押し込められたら身動きのとれない程の混みようである。夏は冷房はないし、ぐっしょり汗まみれになってしまう。臭いし、ノミなどを移されるし、地獄の苦しみである。通勤でかなりのエネルギーを消耗してしまう。

1週間の工場見学を一応終えて、いよいよ検査部の実験室に配属され、清水部長の指導を受けることになる。

鉄の性質について全く知識がないので、文献によって鉄に関する基礎知識を修得するように勧められる。研究部から文献を借り出してきて勉強が始まる。

肉体労働ではないが馴れない仕事で疲れる。

1か月程して、鉄製品の試験片を使って硬度の測定実験を試みる。硬度に関して理論計算値と実験地の照合を行ったりする。

鉄の合金理論、弾性学、塑性学に関する勉強を続ける一方、技術部に依頼して試料の顕微鏡写真を撮ってもらって観察したり、X線装置を使って鉄片内部の傷の発見実験を試みたりする。

7月になると、時々空襲の警戒警報が発令され、工場は緊張してものものしくなる。幸いに名古屋への空襲はなかったが、サイパン島では守備隊全員戦死が報ぜられ、戦況も芳しくなく、暗い気持ちに襲われる。

毎日の日課にも次第に馴れ、暑い夏も過ぎ秋を迎える。1日の大半は鉄の性質に関する勉強に励み、鉄製品の検査試験に立ち合うなどの日課をこなして過ごす。

10月9日、会社から報酬として103円81銭を頂く。これは大変有難く、早速、東大文献会から出ている独乙語の原著『物理のハンドブック』の複製本を注文する。値段が98円で、高価のため買えないでいた本が手に入ることになり嬉しかった。これは勤労働員の記念品となった。

10月20日には米軍がフィリピンのレイテ島に上陸とのニュースが報じられ、戦局もいよいよ急を告げる状態となる。

10月の末になり、勤労働員も終えて大学へ復帰することができるという話が持ち上がり、朗報として伝えられた。顧みれば約半年間の動員は会社のためにはあまり役に立たず、申し訳ない気持ちであったが、社会勉強としては貴重な体験であった。

11月2日、工場ではすっかり後片付けをしてお別れすることになった。大学生活に戻るために、また八事のもとの下宿へ荷物を送るなどし、11月6日、半年振りに懐かしい大学へ登校することになる。

主任の宮部教授より、これからの授業について説明があり、翌年の9月卒業まで、大体、午前中は素粒子論、相対論、量子論、原子核、宇宙線、物性論等の近代物理学の講義、午後は早川助教授の研究室に配属されて、補助員として働きながら卒業研究を完成するようと言渡された。

早川先生は東大物理の門下で、原子分光学、光物性の研究分野のホープといわれる若手研究者である。

早川先生にお会いして、卒業研究について打ち合わせをする。研究室には東大から大学院特別研究生になって来ておられる生源寺さんと一緒に分光学、いわゆるスペクトル分析の研究を手伝うよう指示される。

講義の方もそれぞれの先生のお得意の最先端の現代物理学の話で活気に満ち大変興味ふかいものが多いが、難解で容易に理解できないものが多い。

記憶に残っているのは坂田教授の原子核の講義の中で原子爆弾についての話である。ベルリンの核化学者ハーン等により、ウラン 235 に中性子を当てると核分裂を起こすことが報ぜられ、コペンハーゲンのマイトナー等が実験で確かめた。この反応で質量がエネルギーに変換されて大きなエネルギーが発生することが分かった。核分裂によって生ずる複数の中性子を利用して連鎖反応を起こすことができれば、普通の化学反応で生ずるエネルギーの数千万倍のエネルギーを取り出すことが可能であり、恐るべき兵器の出現となる。こんな話を聞いていやな予感を覚えたことを記憶している。

卒業研究実験では真空放電装置を自作することになり、それには硝子細工で組み立てねばならず、先ず、硝子細工の練習を始める。物理実験の授業で初歩的なテクニックは学んではいるが、その程度では全く不十分で、毎日硝子細工の修練に励む。2週間程して、不細工ながら低圧孤光放電の装置ができ上り、何とか美しい真空放電を作ることに成功した。

この頃から時々空襲警報が発令される。敵の偵察機が来襲するようになる。機影は見えないが、名古屋近辺へ屢々偵察に来るようになった。何か落ち着かない気分になる。

実験のほうは次第に馴れて、真空放電の光を分光器を通してスペクトルを作り、これを写真撮影して解析するという手法もものにするようになった。これからいよいよ、いろいろの物質の分子結合状態をスペクトル分析によって解明するという仕事が始まる準備が整ったことになる。実験はいずれも暗室で行われ、暗室での生活が始まった。

このようにして講義も実験も漸く軌道に乗り始めたのに、11月24日にはマリアナ基地から B29 約 100 機が初めて東京空襲とのニュースが飛び込んだ。いよいよ名古屋も危ないと覚悟しなければならなくなった。

12月7日、実験中に初めて大地震を経験する。表に飛び出し芝生の上に立ったが、体がふらつく程の揺れであった。実験室では硝子瓶が一つ棚から落ちた程度で、ほとんど被害はなかったが、停電して何もできなくなった。これはいわゆる東南海地震で、報道では被害は極めて軽微とのことであったが、熊野灘では8~10メートルの津波が襲い、死者998名、全壊家屋26,130戸、特に名古屋の重工業地区で甚大な被害を受けた大地震であった。

教室主任の宮部教授は東大の地震研究所から来られた地震の権威であり、団長として調査に当たられた。

12月12日には夜2回警戒警報が発令されて驚いたが、翌13日の午後、B29、80機が名古屋の工業地帯を爆撃した。爆弾が落下する時のゴーという音と地響きを感じた。生まれて初めての戦争の場面を目の当たりにした。翌日、大学の校庭にも高射砲弾の破片が数個落ちているのが発見され、空襲時に屋外で見物するのも危険であることを知った。

この頃から大学では夜間警備のため宿直が行われるようになり、週に1回程度学生も宿直当番がまわってくることになる。

B29の空襲は12月18日、22日と100機内外で行われた。

昭和20年の正月は家で過ごし、3日に名古屋へ出掛けたが、B29の80機が来襲、大本營の発表では、17機撃墜、25機撃破とあったが、現場で観察していたところ、そんな戦果があったとは到底思えなかった。

1月13日の早朝、ひどい地震で目を覚ます。前月の東南海地震ほどには感じなかったが、振動と共にゴウーという音が聞こえたので、震源は近いと直感した。

翌日の朝日新聞によると、「東海地方に地震、被害最小限に防止、死傷者は極めて少なく、火災はなし。重要施設の被害はなく、生産陣は全く健在」とあり、大した地震ではなかったと安心した。

3日程して家から手紙が届き、生家の周囲は被害はあったが、我が家は大した被害はなくすんだという知らせであった。

2月になって家へ帰ってみたら、わが家は屋根瓦が相当に傷んでおり、周辺の家は想像以上の壊れ方である。余震が頻繁に起り、家の中では危険を感じ、厳寒の季節に野外に小屋を建て、夜を過ごすような状態であった。

宮部教授はまた団長として南三河地方の調査を担当された。

この地震は三河地震と命名され、その後判明した地震の全容は次のような大地震であった。

M6.8、震源は愛知県南部。死者2,306、住宅全壊9,189。

特に幡豆郡の被害大。深津断層（延長90キロメートル）

上下ずれ最大2メートル、津波 蒲郡で2メートル

と新聞報道と異なり、大きな被害をもたらした大地震であった。

この頃であったと思うが、体が異状に痒くてたまらなくなる。皮膚病にかかったのだろうと思い、明日にでも大学病院の皮膚科を訪ねようと、ふと裸になって衣類を見たら、肌着の縫い目に小さな米粒状の卵様のものが無数に並んで

いるのを発見した。見たこともない卵であったが、直ちに虱の卵であることを確信した。下宿のおばさんにお湯を沸かしてもらい、衣類を全部熱湯に浸して卵を熱湯で殺した。虱に食われるとは初めての経験でびっくり仰天したが、これは宿直で不潔な夜具からうつされたものであろう。それにしても病院を訪ねて大恥をかくところであった。

3月に入って、B29の爆撃はそれまで軍需工場に限られていたのが、焼夷弾、爆弾混合の市内無差別爆撃に変わり、様相は一変した。市民殺傷が目的の攻撃に変わった。

3月9日から10日にかけて東京の下町地区を狙ったB29、130機の大空襲は一夜にして10万人の住民を焼き殺した。核兵器の前の無差別攻撃の中で、ゲルニカ、重慶、ドレスデンと市民殺戮を目的とした戦闘行為の中で最も大規模で、しかも周到に準備された計画だったことを免れることはできない。人道に反する悪魔的行為は人類歴史の中から決して消し去ることができない。

たまたまこの時期、指導教官の早川先生は、3月の休暇で親元の東京に帰省しておられた。行方を案じていたのであるが、数日経って帰られる予定日を過ぎても帰えられず、何の連絡もない。主任の宮部教授も心配されて、あちこち問い合わせをされても何の手掛かりも得られない。ご家族によると、東京の大空襲で行方不明になられた模様とのこと、最悪の事態を招いてしまったことになる。

(長崎大学名誉教授)